
だいたいカノジョ

葱田小鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だいたいカノジヨ

【Nコード】

N90420

【作者名】

葱田小鹿

【あらすじ】

ダブルデートの待ち合わせの時のお話です。

待ち人、来らず。

だがしかし、ああ、緊張する。というか凄く緊張している。具体的にどのくらいかっていうと、小学校の時の学芸会で、ステージの上で一人台詞を言った時以上に緊張している。

何故に俺がそこまで緊張しているのかっていうと、今日は俺にとって特別な日であり、また奇怪な体験をすることになる希有な日でもあるからだ。

それでもって何をもって特別か。それは今日が彼女との初デートだからであり、何をもって希有という表現を用いるかと言うと、今日のデートがダブルデートだからだ。

そう、ダブルデート。

本来デートとは、好きな者同士が好きな相手と好きな場所に行つて好きな事をして好きなモノを食べて好きなだけ同じ時間を過ごす、という甘い蜜まみれのイベントである。

そしてそのデートを二組のカップルが一つのグループとなって密度二倍で行うデートがダブルデートとである。

そんな糖尿病一直線みたいなイベントがこの地球上に存在するなんて、ちよつと前の俺にはまったく考えられなかったことだけど、実際に今から体験する身としては、それが本当に楽しみでならない。まあ、そんなことはどうでもいい。

とりあえず今日はデートだ。

しかも彼女との待ちに待った初デート。

これはもう心が躍らないわけがない。踊らなければ男じゃない。

まあ、実際は心だけでなく身体まで躍り出しそう、結果として昨日の夜は興奮して寝られなかったけど、今朝はきっちり起きられたから問題なし。寝坊して講義に間に合わないって分かっているても覚

醒しない俺の頭も、重要なイベントが控えている今朝だけはきちんと覚醒してくれた。素晴らしいことだ。ビバ・デート。

お気に入りの腕時計を見れば、現在時刻は午前九時半。十時待ち合わせなのに三十分も早く来るのはベタすぎて逆に違和感がないだろう。

でも、まあ少しくらいは、彼女だって今日のデートを楽しみにして昨夜は寝られなくて、ちょっと興奮した感じで「早めに来ちゃった」みたいな展開を期待していないわけじゃないけど、彼女はもう少しもなく時間に正確なので、そういった偶発的なイベントを本気で期待しているわけじゃない。というか、その手の彼女の正確さはもう正確過ぎて、もはや世界の標準時計にさえなれそうなくらいのレベルなので、そういったハプニング的なイベントは全く期待できないのが、少しだけ悲しいと言えば悲しいことだった。

しかし。今日はデートだから全てが許せる。待ち合わせ時間よりも前に来たら万々歳だし、時間通りならそれはそれで文句のつけようはないし、遅刻でもしようものならそれこそ何時間だって待ってやる。

そんな感じでいろいろなことを期待して待っていたら、だいたい俺と同じような雰囲気での服装でいたい俺と同じように顔がにやけててほしい俺と同じようにそわそわとしながら俺の方へと近づいてくる男がいた。

彼が俺の待ち人だ。まあ、最初に断っておこうと思うが、言うまでも無く、ご存知の通り、彼は俺の彼女ではない。

この男は俺と一緒にダブルデートをすることになったカップルの男の方、兼、俺の大学の同級生であるガモウ・ヨシタケだ。

「よお、早いな」

ヨシタケが右手を上げて挨拶した。随分とクラシカルな挨拶だ。

「そう言うお前だって、だいぶ早いだろ」

まだ待ち合わせ時刻まで二十分以上の時間があつた。

「まあな。ちよつと昨日は興奮して寝られなくてな」

どうやらこいつも俺と同レベルらしい。

まあ、お互いに今の彼女とは初めてのデートなわけで、当然ながらダブルデートも初めてなわけだ。最初のデートにしちゃハードルが高いかもしれないが、俺とヨシタケにしたら一人でも知った顔がいた方が気楽だという事だった。

それに本音を言えば、お互いがお互いの彼女に興味があるのだ。

「やつとお前の彼女を実際に見られるよ」ヨシタケがにやりと笑いながら言った。

実のところ、彼は写真で何度か俺の彼女を見たことがある。そのたびにヨシタケは「かわいい」を連呼するので、最初の方は俺も優越感に浸っていたのだが、最後は鬱陶しくなってしまうくらい、ヨシタケはその形容詞を連呼していた。まあ、実際に俺の彼女は可愛いのだが。

「でも、俺なんかお前の彼女見たこと無いぞ」

俺がそう言うと、ヨシタケはまたにやりと笑った。

「知ってるって。だから今日、ダブルデートにしたんだろ？」

「まあな、メインはお互いの彼女のお披露目……あ、来た」

俺がそう言うと、ヨシタケは俺が見ている方向を見た。

そこにはやや小柄の、大人しめの白いワンピースを着た俺の彼女がこちらに向かって歩いているのが見えた。

彼女は最短距離で俺たちに近づいてきて、俺の前に来た後、まず俺を見て、それからヨシタケを見た。

「ヨシタケさん、こんにちは」

満面の笑みでヨシタケに微笑みながら挨拶をする彼女。うん、はたから見てもやっぱり可愛い。

「こんにちは」負けずに満面の笑みでヨシタケが答える。「俺の彼女がまだ来てないから、もう少し待ってて」

「はい」

俺の彼女が歯切れの良い返事をする。腕時計で時間を確認すると、十時ジャストだった。さすが俺の彼女。時間ぴったりである。

それに比べて、ヨシタケの彼女は珍しく遅れているようだ。

「時間過ぎたぞ。彼女が遅れるなんて珍しいんじゃないのか？」

「今日は研究室でメンテがあつたんだよ。だから研究室に寄って
から来る予定になつてはるはずだから、少し時間がかかる」ヨシタケ
はケータイで時刻を確認しながら言った。「でも、もうそろそろ来
る時間なんだけど……」

ヨシタケが周りを窺うようにきよるきよると、しばらくして
から彼は「あつ」と言葉を上げた。

「来た来た」ヨシタケは駅から出てくる人ばかりに向けて手を振
つた。「おーい」

ヨシタケが手を振ると、多くの人からなる流れの中から一つだけ
がその流れに逆らつてこちらへ向かうのが見えた。

「遅れてごめんなさい、ヨシタケさん」

「良いの良いの、気にしない」

ヨシタケの彼女は長い黒髪で、その容姿は日本美人の典型だった。
整った顔立ちは完璧なまでの左右対称形で、美容整形した女性芸能
人並みに美しい。それに、物腰と物言いから奥ゆかしい雰囲気と清
楚な印象を受ける。

俺の彼女がキュートだとしたら、ヨシタケの彼女はビューティフ
ルだろう。

「こんにちは」

「……」

俺が挨拶をすると、ヨシタケの彼女はぎこちなく微笑みながら俺
に向かつて首を傾げた。それがまたどことなく奥ゆかしい。

とにかく、たとえばたない会話の誤魔化しだとしても、奥ゆかし
い雰囲気が良い。現に俺がヨシタケの彼女をまじまじと見ると、そ
んな俺を見てヨシタケの彼女は首を傾げるだけだ。逃げたり、奇声
を上げたり、襲いかかって来るようなことは絶対にない。

そして俺がヨシタケの彼女を見ているように、ヨシタケも俺の彼
女をまじまじと見ていた。

「しかし、いつ見てもお前の彼女は可愛いな」

俺の彼女を見ていたヨシタケがぼつりと言った。

「そりゃそうだよ。あのレベルはなかなか無いよ」

「まっただよ。お前には不釣り合いなくらい可愛い。本当にお前の彼女か？」

「たぶんね。だいたい俺の彼女だと思う」

俺がそう言うと、ヨシタケは苦笑した。

「つか、見た目もそうだけど、中身も良いな。待ち合わせの場所に来て、まずお前よりも先にお前の友人である俺に挨拶するんだぜ。たまんねえよ」

確かに、そこらへんの言動は他のものではなかなか真似できるものではないだろう。

「でもお前の彼女も良いじゃん。流石に今の俺の彼女と比べてみれば地味だけど、最初の頃は俺も羨ましかったんだぞ」

それを聞いて、ヨシタケは嬉しそうに笑った。

「それでも一応、見た目よりも中身重視なんだぜ。そのおかげであまり話していて嫌な感じはしないだろう？」

確かにヨシタケの彼女は俺の彼女と比べてもなんら変り無い口調や仕草だった。話し方も嫌な違和感を抱くことは無く、かなり自然だ。

「確かに。だからお前が長く続いてんのか」

「いやいや。俺は今でも一途だぜ。俺にとつての彼女はあいつだけだ」

口から出まかせを言うヨシタケを無視して、俺は自分の彼女とヨシタケの彼女を見比べた。

ふと、何となく思ったことを二人に言ってみる。

「ちよつと、二人とも並んで見て」

俺がそう言うと、二人は少しだけ首を傾げながら、それぞれの横に並ぶ。

俺の彼女とヨシタケの彼女が横に並んだ。俺の彼女は小柄なので

その身長はヨシタケの彼女の肩の位置くらいになる。

「ごうしてみると、姉妹に見えないことも無いな」

「そりゃ、会社は同じだからな」

俺がコメントするとヨシタケはそう言って、さらに自分の彼女と俺の彼女を見比べていた。

その後、数分間二人を見つめた後、ヨシタケが言った。

「ああ、やっぱりお前の彼女は可愛いな」

どこか納得したようにヨシタケが言った。

「当たり前だ。デザイナーの腕が違っただよ」

格が違うのだ、格が。

「俺も次は同じやつにしようかなー」

唐突に恐ろしい事を言うヨシタケ。

「おいおい、金の余裕あるのか？」

「決めた。今から貯金して、来年の夏までには新モデルに乗り換える」

「ったく、相変わらず乗り換えが早いな」

「流行に敏感と言ってくれ」

「はいはい。わかりましたよ」俺は苦笑しながら言った。「だけどさ、頼むから俺の彼女と同じモデルだけはやめろよ」

「わかってるって。流石にそこまで執着しねーよ」

「ならいいや」

「まあ、でも万が一、被る可能性も無いわけで」

俺が言うと、ヨシタケがまた恐ろしい事を言う。「冗談でもやめてほしいものだ。」

「おいおい。お前と同じ彼女なんていやだぞ」

「冗談だよ、とでも言いたげにヨシタケはくすくすと笑ったあと、やっぱり俺の彼女をまじまじと見てから言う。」

「あー、でも、本当にうらやましいよ。うん、本当にちょっと新しいモデルの件、すこし考えることにするわ」

ヨシタケがまた笑いながら言った。

「しかしホントに可愛いな、お前の彼女。型番いくつ？」

(後書き)

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

将来、恋人の代替ロボットが一般化するような時代が来ないことを祈るばかりです。

何かありましたら感想でも頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042o/>

だいたいカノジョ

2010年11月15日16時57分発行